

平和を追い求めて

—戦争と五回の国葬を経験し、いま語りしたいこと—

2023年2月11日

小畑 哲雄

はじめに

戦前の2・11 「紀元節」の記憶
安倍晋三元首相の暗殺でよぎったいやな予感

山本五十六の国葬(当時15歳)と戦争

戦争の記憶の1ページ目

戦争の最初の思い出は上海事件。二・二六事件で「戒厳令」という言葉を覚えた。小学校4年生の時、甲子園大会を見に行き行って場内アナウンスで軍務の呼び出しがあった。だから夏の甲子園はこのことが思い出されて今も見たくない。



「山本元帥に続け」

東京・日比谷公園での山本五十六の国葬(1943年6月5日)に合わせて、鈴が鳴り、教師が「黙とう!」と発声し、生徒は一齐に目を閉じた。国葬の前後、「予科練(海軍飛行予科練習生)に志願せよ」と呼びかけられ、志願しない生徒約500人が学校の剣道場に集められ、「山本元帥に続け」「志願せんか」と、床を踏み鳴らしながら怒る教師の姿が、今も記憶に残る。

私が今でも許せないのは、成績が悪い者や問題を起こした者に、「お前はそのままでは落第だけど予科練に行ったら4年修了したことにしてやる」と言って寮の仲間が行かされたこと。

親友の大塚くんは故郷を発つとき、「こんなところ(予科練)行きとうなかよ」と熊本弁で言った。それが忘れられない。海軍の予科練に行ったものは、全員無事で帰ってきたが、陸軍の特別幹部候補生に行った大塚くんは中国北京で戦病死した。戦後墓参りをした際に、大塚くんのお母さんの悲しみにふれたことが、私の戦争反対の原点となっている。5月3日の憲法記念日は大塚くんの命日である。

国葬令(1926年制定)

国家に「偉勲のある者」に対し、天皇の特別な意向として国葬をすると定めていた。山本は皇族や華族以外で国葬された初のケースだった。

戦後・吉田茂の国葬体験

吉田茂国葬時は、40歳で大阪市の私立淀川女子高（現・私立英真学園高）の国語教諭だった。国葬と聞いて戦時中の記憶がよみがえった。なくなったと思っていた国葬が亡霊のように復活し、気味悪いという気持ち。だが、国葬当日は拍子抜け。学校の正門に半旗が掲揚され、授業は午前中のみ短縮されたが、黙とうなどの強制はなかった。職員会議で国葬が取り上げられた記憶もない。

京大天皇事件について

京大天皇事件

1951年11月12日、京都行幸中の昭和天皇が京都大学を視察した際、来学を待ち構えていた学生らが、プラカードや赤旗を立てたり、「平和の歌」を一斉に歌い出し、天皇が大学本部玄関に入ってしまった際これを追いかけるといった行動を起こした一連の経過を指すもの。天皇の行動が「妨害」されるには至らなかったものの、翌日以降各種報道や国会で学生の行動が問題視され、当時の全学自治会同学会が解散処分となった。

天皇来学を歓迎もしないが拒否もしない

1951年4月、23歳で京都大学に入学し、6月、全学自治会である京大同学会の総務部執行委員に選出され、情宣担当となり、7月に総合原爆展を開いた。多くの学生は帰省して見ていないから、11月に原爆展を学内でやろうとした。しかし、大学側からだめだと言われ、後に昭和天皇が来るということがわかった。京大に昭和天皇が来れば、何か起こると思うのは当たり前だった。「デモしよか」「赤旗を立てようか」という話もあったが、同学会としては、「歓迎もしないが拒否もしない、ありのままの京大を見てもらおう」となった。

「天皇裕仁殿」

ところが、天皇が通る廊下だけきれいに整備され、通り道の裏側は荒廃したままだった。「見せるなら、戦争で荒れ果てた大学のありのままの姿を見せるべきではないか」と思い、それで学生の気持ちを天皇に伝えるために公開質問状（資料）を出すことにした。

質問状の原稿が11月10日に届いて読むと、宛名が書いてなかった。ハッと、日本に名字がない人がいたんだと思った。それで「天皇裕仁殿」と書き加えた。公開質問状は、学長を通して渡してもらおうとしたが、受け取ってもらえなかった。大学の正門を出たところで私服刑事2人に行く手を阻まれ、逮捕されたため、事件の現場には立ち会っていない。

おわりに

東郷平八郎、西園寺公望、山本五十六、吉田茂、安倍晋三の 5 人の国葬（皇族を除く）と戦争を経験し、戦争を知らない世代に伝えたいこと。

京大天皇事件の公開質問状から、天皇制について今改めて思うこと。

51 年当時の学生にとって、戦争の体験、記憶は小さくなかった。勤労働員、空襲などの経験は もちろん、家族を戦争で失った、自分自身が「軍籍」にあった、というものも少なくなかった。青木も、武田も、そして私も、学校こそ違い旧日本陸軍の将校生徒であった。中岡は海軍兵学校の生徒であった。彼は 60 年後の集まりの席で、「公開質問状」を書いているとき、自分の目の前に浮かんでいたのは、三八式小銃の銃身に刻まれた「菊の紋章」であった、と語っている。憲法 9 条がありながらも、着々と進む「再軍備」、 「天皇の神格化」への懸念は、当時の学生には、共通のものであった。

（小畑哲雄「平和を追い求めた青春」より）